

して後衆生に知法思國の精神を啓發せしむる様に
するのが宗教家の責務であり、眞の義勇奉公と云
ふ可きである。義を見てせざるは勇無く、義を見
て爲ざるは本化の徒に非ず、若し今日の暴動者及
び被害者も日蓮主義を奉持して居たらば米の有
るに騰貴させる様か不道德漢は無かつたらふに思
へば主義傳導者所謂門下生が怠慢で有り不誠實で
あるから社界人心が邪義に隠掩されるのであると
痛切に感ずる。最高の宗教道德が確定すれば不道
徳の人間が無くなるから天下萬民一同吹風枝不鳴
の安樂處に到達する事が出來ると、之は余が決し
て疑はぬ所、宗祖觀心本尊抄の四十五字の法体
は余の證明の根據である。特に自ら日蓮主義傳導
者と僞稱する人々の覺醒を強要する。

平和の巷

望月海正

初秋の陽が眞紅き夕陽雲に名残を止めて西の空
に沈み蒼然たる暮色は木立も深き此辟地を覆ふて

寂しさはました——その暗きを破つて光々たる月
は東天に掛り圓滿な姿を現はした。憐れむが様に
悲しむが様に又欣然たるが如き其面——私はジ
ツと其れを視入つた。茫然として立つた。其間起
つた感？それは此んな事であつた。自分は今こう
して茫然と月を眺めて居る。此月同じく世の凡て
の人は眺めるであらう。バルコニーで眺むる月、
賤が屋に荒蕪の上で眺むる月、或は都の月、田舎
の月、と眺むる人、場所等に依つて、各感は色々
であらう。就中故國を後に何百里、荒鷲かける彼
の廣野に在つて刀にうつる、其月を眺むる我同胞
如何に國の爲、君が爲と捧げまつた身なりとも
木石からぬ人心さすが故國戀しと打仰ぐであらう
あゝ思へば何故にかゝる悲惨を振舞をせねばなら
ぬ人生か、あたら貴き人命を野菜同様に切捨て、
而もそれで満足に思ふ。居る。なんと云ふ野獸的
行爲であらう、自己の生命が貴いと同様に他人の
生命も輕んずべきものではない、これが萬物の靈
長と誇る人間の行であらうか、又本能であらうか

漸くしてまで人間は自己の爲に生存して行かなければならぬのか。成程戦争は平和の爲當然起らぬばからぬ事かもしれぬ。而し平和と云ふものはそんな争闘に依つて保持して行かれる様な弱いものではない。否小さいものではない、世の人は平和と云ふことを何う考へて居るか、個人々々の間に保たるゝ自己の爲の平和、それが少し大きくあつて漸く一國內の平和。——其の平和さへも動もすれば保ち兼ねるではないか、否保てないのが當然だ。彼の腰弱の露西亞を見よ、外には強敵を控へて國民一同にそれに當るべき秋のありながら尙自黨の爲に内亂をやつて居るではないか。悲惨なる廢帝の末路を見よ、苟も國民性を自覺する者であるならば彼の様な無道な振舞が出來得べきものではない。されど、あれが彼の國の主義所謂デモクラシイなるものであるから仕方がない。又あの獨逸を見よ！世界的平和を叫ぶが如く装ひつゝ學問に事業に軍備に意を用ひて文明の歩を進め來つたのも此度の大亂に打つて出で世界を一呑にしてや

らうと云ふカイザーが大野心の發露ではないか。それでかくて他人と他人の喧嘩に誰れが口出しするものか、翻つて我日本は何うか？露國の二の舞として飛び出し内面には先頃の様な米價暴騰事件を引きし内閣は盛に彈劾された。さて外に眼をやれば自分等の地位が危い(世界に於ける)西比利亞へ出兵して腰弱の露西亞を助けねばからぬと云ふ内外多事の時である。而して國民の心理状態は何うである。一向緊張した様にも見えぬ、取越苦勞の様であるけれど『轉ばぬ先の杖』で充分用意して掛らねばからぬ。若し戦争には幸に勝つたとする、然し尙がら戦後に當然來るべき經濟問題、國民精神の怠廢等の事に就いては大いに考慮を要するではないか。現今政治、經濟、兩者の關係を無視して失敗する様な政治家、又國民精神の怠廢を見てこれが恢復策をも講せまい處の教育家、宗教家、此度の米騒動などは此等の人を自覺さすべき大警鐘である、だが餘程熟睡中と見れば容易に目覚めそうもない。我國民の弊害とも云ふべき西洋文

物の崇拜、そは今新に始まつた事ではないが、大いに憂慮すべきことである、各國各々自國の特徴と云ふものがある。我國には世界各國に類なき國民の誇るべき特徴がある、其の特徴を培ひ養つていつて世界的のものとなせねばならぬ、カイゼルは世界の君主を以て任じて居た、従つて自國も西歐に於ける一國として満足せぬ。だから此度の様な無謀な仕事に平氣でやれる、我國は由來東洋に於ける日本と云ふ様を極めて貧弱な日本では無いのである。皇統蓮綿たる 陛下は世界の各國を統治すべき大責任ある 天皇である。國民とても世界に超越せる大國民であると云ふ大自覺の下に立つて始めて日本國と云ひ得るのである(日の本の國)我國民には昔よりして日の本の國民たる世界的大國民の本能を有して居るのである、其の本能を發揮せしむると否とは國民の努力にあるのである。斯の様に考へたならば世界の所有人類は皆悉く我同胞である。我同胞たる以上其處に何等の争闘もなく圓滿に平和を世界が建設さるべきである。又

一步進んで我は宇宙本体の一分子である、我は本体の胎内に生活して行く所の者である。されば宇宙世界の現象は、人と云ひ草木と云ひ、皆自己と同一である、自己の相對するもの凡てが自己である、自己を離れて他に何物もなしと考へたならばそこには決して争闘などの起るべき理がない、故に絶待平和の巷が出現さるべきである。此の考へを以て所謂宗祖の三大誓願の如く我は世界の大神であり、柱であり(眼目である)自覺し、自己が一舉一動は世界を支配するものであると思惟し日々の業務を各々分に従つてベストを盡し現實に處して行つたならば其處こそ何等の束縛もなく、争闘もなく真に自由な温味のある一大平和の巷であり、理想の歡樂郷であらねばならぬ。それは丁度中天に掛る此の月が世界的の有らゆる物を照らして憂き事喜ぶべき事凡てを包擁して而も圓滿ある姿を以て無限の慈悲を投げて居る様な容姿そのものの如きものではなからうか——涼しい秋風は折柄月光を浴びて悄然たる梢を渡つた——と甘い酔ふ

様なもくさいの句はきつう鼻を打つた——くさむらには依然として虫の音が寂しさを告げて居る。

名月の感

中二 北島 江楓

三句に餘る暑中休暇に歸省して再び靈地の人となつた予は、故歸に離れた悲しさと靈地の秋の寂しさに感慨轉た無量である、折しも今宵は陰曆八月十五日光々と澄み渡つた月は普く人界を照して彼此の隔てがない、されど此の月を眺むる人の心は千萬萬別であらう。

月影のいたらぬ里はかけれども

眺むる人の心にそすむ

予亦今宵の月を見て座ろに故郷を思ふの情いやまして愁然たらざるを得ない。されど春風秋雨六百七十餘年の其昔、海光さわやかき清澄山の春の曙に御開宗遊ばされてより武藏の野なる池上へ非滅現滅の涅槃に入り給ふまでの慘風悲雨の御生涯を偲びまつれば、今の我の餘りに意口地なきを嘆

かざるを得ない、と共に又聖祖が此の山に於ける九ヶ年の御生活の態を思ひ出さずには居られない而も其の聖祖が此の九ヶ年の清き静かな御生活に入りたまうまでの御心を拜想して轉たいひ知れぬ悲しさの念が湧くのである。そは波木井殿書に

如何にも今は叶ふまじき世あり國の恩を報せんが爲に國に留りて三度は諫むべし用ひずんば山林に身を隠せよといふ本文あり本より存知せり如何なる山中にも籠りて命の程は法華經を讀誦し奉らばやと思ふより外は他事なし

私は此の御書を拜する毎に大きな溜息を聞かされる様な氣がする『如何にも今は叶ふまじき世あり』對他の生活はこれでやめやう、社會生活から逃れやう『如何なる山中にも籠りて命の程は法華經を讀誦し奉らばやと思ふより外他事なし』さうして内證の生活に籠らう、自己の心の中に住んで居たい、かくして九ヶ年の静寂なる生活が始まつたのである。然しちがら聖祖は國を愛するの念が深い盲ひたれば盲ひたるほど不憫さがいやますの